

第3回：バレイショの種イモは切って植える？それともそのまま？

日本のバレイショ栽培では、植えつけ3週間ほど前から10度~20度の低温と強光条件下で浴光育芽し、種イモを2分割あるいは4分割に植えつけ前に切断し、重さ50gほどの種イモを植えつける方法が一般的である。種イモの切断には必ず頂芽を通して切断するが、一部大規模な経営では浴光育芽した30gほどの全粒種イモを丸ごと機械で植えつける方法もみられる。種イモの目安は40-60gとされているが、極端に小さな種イモを植えた場合は生育が遅れて減収することがあり、逆に大きな種イモだからといって多収になるとはかぎらない。

バレイショの多収栽培技術における種イモの良否・大小・切断の有無はその後の生育過程、さらには収量に大きく影響する。従って、野菜栽培技術コースの研修では切断種イモと小全粒種イモを使ったバレイショの収量に関連した共通実験をおこない、またバレイショ栽培の講義や北海道の(独)種苗管理センター北海道中央農場で種バレイショ生産やその配布について見学、機械植えのバレイショ生産地の見学等を実施している。種イモを切断しないで全粒のまま植えることは切断の手間、ウイルス伝染の危険性、機械植えなどを考えればよいことであるが、小粒全粒イモの生産は必ずしも容易ではなく、普通は切断イモを使うことが多いことを研修で伝え、栽培の規模、機械化の導入程度や種イモを含めた経費を検討して、どのような種イモを栽培に適用するかを指導している。

2000年から4ヵ年実施したタジキスタン国別研修では、切断種イモを使い夏秋バレイショ栽培実験をおこなった。タジキスタンの研修員にとって種イモの切断方法およびその栽培は初めての技術であった。栽培の結果は彼等が期待した以上のものとなり、帰国後に同手法での栽培をする計画が検討されていた。2002年弊社財津がタジキスタンへ出張した際、「今まで、全粒を植えていたが、種イモを切断することで種イモ数を増すことができ、作付面積の増加につながった。」という帰国研修員の報告を聞いた。

一方、2006年の野菜栽培技術コースに参加したニカラグアからの研修員は、ジョブレポート報告会において担当する地域のバレイショ生産性の低さを報告し、1)入手の困難な種イモ、2)高い種イモ価格、3)少ない無病種イモを主な理由としてあげた。さらに、バレイショ栽培農家は全粒種イモを利用していること、種イモは20kg袋で輸入され、その中身は小粒から大粒までサイズが不統一であること、輸入された種イモの大きささまざまなサイズの生産力検定試験ははまだ実施されていないことも報告した。そのため、種イモの大きさが収量にどのように影響するかを知ることが急務であることを強調し、大小の種イモ別の生産力検証を目的とした個別実験をおこなった。品種デジマ



バレイショ栽培指導(ニカラグア)

を使い、4段階の重量区(20g、40g、60g、85g)の全粒種イモを使った。実験では各処理区の茎数、収穫物を大きさ(50g以下、50-100g、100g以上)ごとのイモ個数とイモ重量、そして総収量を比較した。その結果、全粒種イモが大きいほど出芽は早く、茎数も多く、生育も旺盛となり、収穫イモ数も多く、85g区が最も高い収量をあげた。また、40gの全粒種イモでも満足する収量をあげたことから、充分浴光育芽した小全粒は種イモとしても利用できることがわかった。この個別実験結果に基づいて帰国後同様のバレイショの栽培試験を担当地域の環境条件で実際におこない、その結果を農家と共有しようというアクションプランを研修の成果として策定した。この結果をもとに、現場の農家に対して適正な助言が行われていくことを期待する。

このようにバレイショの例では、日本における研修で学んだことや体験したことをもとにして、研修員が自国に戻ってからそれぞれの状況に合わせて試験や普及活動が行われている。現地での活動に対するフォローアップを強化することによって、さらなる助言が行えれば、より一層効果のある支援になるものと考えられる。